

URPS

No.02
2018.5

URBAN & REGIONAL PLANNING Seminar.

contents

- 2 巻頭言
- 3 ゼミ教員・学生の活動
- 4・5 卒業論文・修士論文
- 6 卒業修了展示・祝賀会
- 7 卒業生メッセージ・研究室ニュース
- 8 OB・OGの今



「中国四川省涼山イ族自治州美姑県」撮影：李 雪



秋田県立大学 建築環境システム学科 都市・建築計画学研究グループ 都市・地域計画ゼミ

巻頭言

人工知能／Artificial Intelligence (AI)

●AI の浸透と困惑

お掃除ロボットのルンバ、iPhone に搭載された音声対話システム siri、顧客の存在を的確に予測する AI タクシーなど、AI の浸透は身近なところにある。新聞記事・小説や絵画を AI に書（描）かせたり、AI 人事、AI 裁判、AI 政治家という言葉も登場している。アメリカでは、幾つかの州で再犯罪予測に使われており、顔認証によりテロリストを 80 パーセント以上の確率で抽出できるという。これらを理解する上でのキーワードは、ディープラーニングから導き出す「最適解」だ。

但し、人工知能は答えを示すが、その理由は示さない。人は、通常の思考で判断のつかない複雑過ぎる問題に対し、プロセスの正当性に基づき判断を下すという知恵を有している。しかし、人工知能の出す答えに対して、この知恵が適用できない。よって、困惑が生じる。

●相克を越えて

それでも、人工知能の進化を止めることはできない。それを、どう捉え、如何に位置づければ良いのか？

人工知能を語る際、将棋界での人工知能の捉え方が参考になる。2012 年の将棋電王戦で、将棋ソフト「ボンクラーズ」が米長邦雄永世棋聖を破った。近いところでは、2017 年 4 月の電王戦で「ポナンザ」が現役棋士である佐藤天彦名人を破った。今では、ポナンザを上回る elmo という新鋭ソフトが登場しているという。勝ち負けのみで捉えれば、明らかに AI が人間の棋士を凌駕しているのだ。

では、対局した佐藤名人は、どう捉えて、如何に位置づけているのか。彼は、「対局中、自分の眠っていた能力が目覚めるのを感じた。」と語っている。そして、将棋の指し方に変化が生まれた、と他の棋士が指摘している。ナルホド、そうした見方、接し方があるのか。

●人工知能と人間知能（知性）

さて、人工知能は、最後まで意味を読み取るのではなく、構成要素と要素間の関係を読み取る。従って、意味自体を扱っているのではない。では、我々の持つ意味という言葉は何だろう？

人工知能が進化した際、我々の知能（知性）と対等になるのだろうか？あるいは、何が違うのだろうか？結論的に述べれば、最後の違いは「生命」の有無に帰着するのではないかと最近考えている。人工知能には、生命に由来する「本能」というものがない。よって、人間との対等性を得ようとするならば、本能には基づかない欲望や自我というものを「外部」から与えざるを得ない。例えば、ある条件が揃うことにより人工知能の機能を停止させるという仕組みの埋め込みだ。但し、機能の停止、つまり生命の終了の意味の理解は、最後までできないであろう。

山口 邦雄（やまぐち くにお）
都市・建築計画学研究グループ

風と雪、そして秋田

今年、初めての秋田の冬は横浜よりも長く、想像を遙かに超える風と雪があった。元々秋田の冬は、風が強くて強風日数が月に 13 日程度、雲も多く、曇天日数が月に 24 日程度になるらしい。特に、今年はその威力が増し、大雪が多かったため、除排雪費が膨大に膨らみ、秋田市では予算 11 億円にさらに 8 億円を追加、雪の多い横手市では 18 億円に達し、過去最高に迫っているようだ。ちなみに、昨年の秋田市の中心市街地関連事業の総予算が約 4 億円程度であることに比べると、除排雪費がどれほど財政負担となるかが窺える。

その他、風と雪は、飛行機の欠航、鉄道の運休、交通事故、建物・畜産施設の破損など、個人レベルから都市レベルまで様々な影響を及ぼしている。とりわけ、公共交通手段の不安定さから車に依存してしまう結果となり、今後、集約型都市構造（公共交通を中心とする）の形成を進める上で、大きな課題の一つである。

一方、逆に風と雪をポジティブに捉えた動きも存在する。まず、秋田県では強風を自然資源として捉え、風力発電に力を入れており、現在、風力発電導入量の総量は全国 2 位、単年では 3 年連続で全国 1 位となっている。これは再生エネルギーの活用だけでなく、人口減少が著しい秋田において新産業による雇用増加を図る政策である。次に、横手市では平成 17 年に「雪となかよく暮らす条例」を制定し、行政・市民・事業所の役割を分担しながら、雪を生かした快適なまちづくりを進め、魅力のある雪国を創ることを目指している。地域の除雪力の向上はもちろん、かまくらや雪寄せ関連の様々なイベントから雪を生かした観光振興に取り組んでいる。

与条件を変えることができなければ、それに適応しながら答えを見つけていく必要がある。秋田のような、「逆の発想」は研究でも生活でも大切であり、問題そのものを切り口として考えてみることを秋田から日々学んでいる最近である。

尹 莊植（ゆん じゃんしく）
都市・建築計画学研究グループ



ゼミ教員・学生の活動

秋田の茅葺き民家と茅葺き職人 李 雪 助教

かつて農村風景だった茅葺き屋根は近年、急速に失われている。秋田魁新報の記事によって、秋田県内の茅葺き民家は 1977 年にまだ 4000 戸残っていたが、1993 年に 2463 棟しか残っていなかった。その後、秋田県の茅葺き民家実態に関する調査は 1996 年に秋田県立農業短期大学生活環境研究室により行われ、2002 年に秋田県内に残存する茅葺き民家は 550 戸と推定された。2010 年に 400~500 棟が住まいとして使われているということであった。2010 年以降のデータが把握できないが、茅葺き民家は少しずつ消えつつあると考えられる。

1977 年 5 月の秋田魁新報が茅葺き職人と材料の不足の記事が見られたが、当時の職人の数が把握できなかった。2002 年に県内の茅葺き職人が 20 人確認でき、今現在 10 人しかいないという。茅葺き職人の仕事に対しては「重労働」「汚い」「危険」「仕事の量が不安定」のほか、「冬の仕事が無い」という秋田県の天候を反映した思いも見られた。茅葺き職人の仕事の弱点に対して県内の若者職人たちは既存建物の茅葺き屋根の修繕工事をやりながら、「運べる茅葺き小屋」の開発や、誰でも茅葺き仕事を体験できるワークショップの実行などの道も開き、茅葺き屋根を次世代につなげるように努力する姿が見られた。



茅葺き屋根の東屋

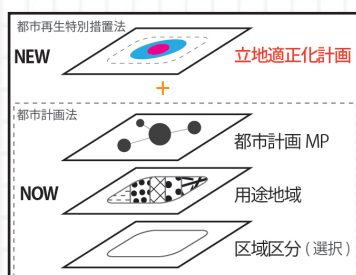


葺き替えを続けている南外村の民家

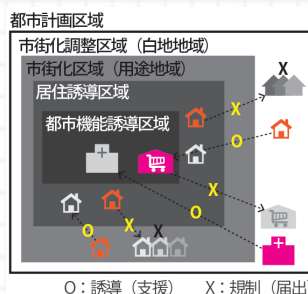
立地適正化計画研究会

尹 荘植 特任助教

2014 年に創設された立地適正化計画は、2017 年 12 月 31 日時点で 116 都市が計画を策定・公表するなど、急速な制度普及が行われている状況です。当ゼミでも 2017 年 5 月から研究会を立ち上げ、計画内容の把握、都市計画 MP との関係性、誘導区域設定の動向を把握した上で、先行事例（札幌市・花巻市）へのヒアリング調査、全国策定都市を対象としたアンケート調査（回収率 94.6%）を行い、より詳細な計画策定の動向と課題、独自の取り組み等を中心に調査・分析を進めております。今年度の学会で研究内容を積極的に発信していく予定ですので、お楽しみにしてください。



立地適正化計画制度の創設



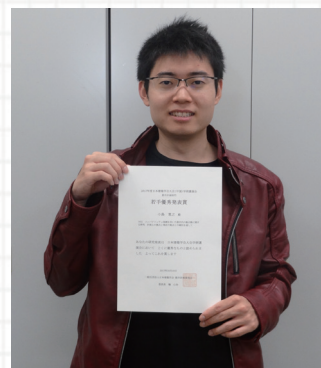
都市・居住機能の誘導と規制の概念

2017年度日本建築学会大会（中国）

若手優秀発表賞

小島 寛之(院2年)

昨年 2017 年の 9 月に広島で行われた建築学会大会での発表を表彰していただきました。指導教員である山口先生をはじめとする教員の方々やゼミ生など私の研究に関わった全ての皆様に感謝申し上げます。発表タイトルは「コンパクトシティ指標を用いた都市内の拠点数に関する研究—計画上の拠点と現状の拠点との峻別を通して—」であり、人口や都市機能を集中させていく際にどのような計画が良いかを議論した内容です。この研究を深化発展させるべく、これまで以上に研究に精進してまいります。



表彰状をいただいた小島さん



About

標高 2000m の美姑県は、中国四川省の成都からバスで 10 時間かけて標高 4000m の山を越えた先に、やっとたどり着くところ。

Cover photo

青い空と、たつぷりと太陽光を浴びる元気な子供たち。高原にある小さな町を味わう重要な要素でしょう。

李 雪

桂 大志 「つくばエクスプレス開通に伴う駅周辺の土地利用と人口数に関する考察 - 茨城県つくば市の3駅を対象として -」

戸嶋 大輔 「若者参入が朝市の出店形態にもたらす影響の基礎的研究 - 秋田県のごじょうめ朝市 plus+ を対象として -」

西田 昂平 「公営住宅の団地統廃合における従前居住者の転居行動と居住満足度に関する調査・分析 - 団地内環境と立地環境の変化に着目して -」



公営住宅の団地統廃合における従前居住者の転居行動と居住満足度に関する調査・分析 - 団地内環境と立地環境の変化に着目して -

西田 昂平

1. 研究の背景と目的

1951年の公営住宅法に基づく公営住宅は、1967~1980年の間に全国で毎年5万戸以上が建設された。2000年を迎えてから、1980年までに建てられた多くの公営住宅は老朽化や耐用年数の経過、行政の財政状況による維持管理が困難な状況となっている。

秋田市では以上の課題に対して、公営住宅の需要等を勘案しながら、効率的な建替え及び管理の実現を目指し、公営住宅の団地統廃合を進めていくという動きがみられる。なお、公営住宅の団地統廃合の研究として小野寺氏の既往研究があるが、全国各地の公営住宅の団地統廃合の実態は明らかにされていない。

本研究は東北6県における公営住宅の団地統廃合の事例を調査して概要を把握し、傾向を分析する。その後、詳細分析として、団地統廃合における団地内環境と立地環境の変化に着目し、従前居住者の転居行動と入居満足度に関する調査、分析を行い、今後の公営住宅の団地統廃合のための一助となることを目的とする。

2. 研究の方法

①東北6県の公営住宅の団地統廃合

2017年6月時点で東北6県において団地統廃合を行った、もしくは団地統廃合を含む建替え事業中の公営住宅を調査対象とする。東北6県庁と108市町村に電話ヒアリング、往復はがき、メール等を用いて、公営住宅の団地統廃合の有無を把握し、有る場合はさらに住宅名と事業の概要について調査を行った。

②詳細分析対象の住宅

竣工事例のうち最も大規模な団地統廃合を行った公営住宅とし、行政ヒアリングと居住者アンケートを行った。

3. 結果

①東北6県の公営住宅の団地統廃合

公営住宅の団地統廃合は東北6県で9事例存在した。竣工事例のうち最大規模の団地統廃合は5団地が統廃合され、管理戸数が260戸ある新屋比内町市営住宅(秋田市)である。また立地環境について、非現地建替えの場合、立地選定に自由度があるため「建替え後の団地」が「従前団地」よりも良くなる傾向であった。しかし、現地建替えの場合、従前団地よりも悪くなる傾向であった。ちなみに、現地建替えの新屋比内町市営住宅はすべての従前団地よりも立地環境が悪くなっていた。

②新屋比内町市営住宅

転居行動について、従前団地の居住者は建替え後の団地までの距離が長くなるほど、建替え後の団地への入居率が低くなっていた。建替え後は、団地内の住棟・敷地環境が向上し、従前入居者の多くが室外環境に満足していた。また、今回は室内についての物的データは入手できなかったが、室内環境にも満足していることが分かった。一方、立地環境に問題があり、それは従前入居者の立地環境の満足度の低さからも窺えた。

表 1. 東北6県における公営住宅の団地統廃合の概要

住宅・団地名 (所在地) 県営・市町村営	建替え 場所※	事業 前後	名称	建設年度	構造	管理戸数 (戸数の増減)	従前団地の跡地 新設団地の従前	移転 距離
1 静ヶ台団地 (酒田市) 市営	非現地	事業前	光ヶ丘五丁目団地	1958~59年	簡二	28戸	空地(一部売却済)	1.1km
		事業前	若竹町団地	1960年	簡二	12戸	売却済	3.2km
		事業前	泉団地	1967~69年	簡二	24戸	売却先公中	1.1km
		事業後	静ヶ台団地	2000~10年	耐火3、4階	54戸(-10戸)	旧静ヶ台団地	当該地
2 橋岡小谷地団地 (村山市) 市営	現地	事業前	橋岡小谷地住宅	1962年	木造平屋	20戸	現地建替え	当該地
		事業後	橋岡新町住宅	1967年	簡平	12戸	雪押し場など	0.7km
3 北新町団地 (酒田市) 県営	非現地	事業前	種岡小谷地団地	2005~07年	木造二階	24戸(-8戸)	現地建替え	当該地
		事業前	松境団地	1964~65年	耐火3~4階	34戸	県立高校駐車場	1.1km
		事業前	住吉団地	1967~68年	耐火4階	32戸	空き地	0.7km
4 新屋比内町市営住宅 (秋田市) 市営	現地	事業前	北新町団地	2007年	耐火8階	66戸(±0)	県立高校	当該地
		事業前	新屋比内町市営住宅	1962~64年	簡平	174戸	現地建替え	当該地
		事業前	新屋沖田住宅	1968、77年	耐火3階、簡二	36戸	民間の住宅	1.1km
		事業前	割山住宅	1957~58年	簡平	40戸	民間の住宅	2.7km
		事業前	金砂住宅	1954年	簡二	12戸	県立高校駐車場	7.4km
事業後	將軍野住宅	1955~56年	簡二	16戸	薬局の駐車場	8.9km		
5 ひろば台団地 (青森市) 町営	非現地	事業前	新屋比内町市営住宅	2009~10年	耐火4~8階	260戸(-18戸)	現地建替え	当該地
		事業前	広場団地	1964~66年	木造平屋	28戸	更地、今後は未定	0.4km
		事業前	高屋敷団地	1966年	木造平屋	7戸	今後は未定	5.1km
		事業後	五日市団地	1973~76年	木造平屋	24戸	財産区へ返却	1.5km
6 城前団地 (金沢市) 市営	現地	事業前	ひろば台団地	2011~18年	木造平屋	60戸(+1戸)	町立中学校	当該地
		事業前	城前団地	1954~56、81年	耐火2階、簡平・二	94戸	現地建替え	当該地
		事業前	徒之町団地	1952年	耐火2階	16戸	今後は未定	0.5km
7 小柳第一団地 (青森市) 市営	現地	事業前	天塚寺口団地	1953年	耐火2階	8戸	今後は未定	0.3km
		事業前	城前団地	2014~19年	耐火2、4階	112戸(-6戸)	現地建替え	当該地
		事業前	小柳第一団地	1972~74年	耐火4階	320戸	現地建替え	当該地
8 うべ団地 (久慈市) 市営	非現地	事業前	小柳第二団地	1970年	簡平・二	137戸	跡地無し	4.8km
		事業前	日向地区住宅	1960年	木造平屋	11戸	民間に売却	0.1km
		事業後	和野平地区住宅	1960年	簡平	8戸	今後は未定	0.6km
9 高崎団地 (大畑町) 町営	非現地	事業前	うべ団地	2016~17年	木造平屋	16戸(-3戸)	民間から新規買取	当該地
		事業前	東沢団地	1973年	簡平	20戸	住宅団地	2.8km
		事業後	田布施団地	1977年	簡平	20戸	今後は未定	5.1km
事業後	高崎団地	2018~19年	木造平屋二階	32戸(-8戸)	個人所有の土地	当該地		

備考: 2017年6月時点において 従前団地 事業竣工 事業中
※現地: 既設の住宅を除却した土地の全部又は一部の区域。 非現地: 他の新たな敷地。

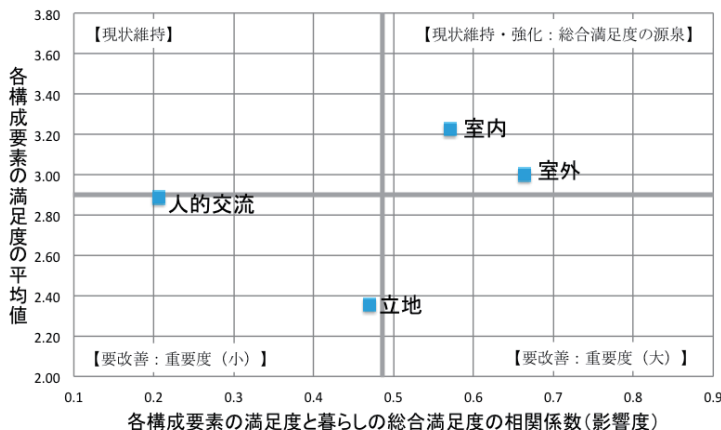


図 1. 従前居住者におけるCSグラフ

荒生 竜也 「栃木市歴史的町並み形成地区における取組みの成果
- 街なみ環境整備事業と伝統的建造物群保存地区の事業に着目して -」

勝山 和弥 「秋田県能代市の大規模火災に対する復興都市計画の研究
- 計画内容が都市景観形成に及ぼした影響に着目して -」

田口 真也 「重要文化的景観の建築保護における歴史まちづくり法併用の効果と課題」

秋田県能代市の大規模火災に対する復興都市計画の研究

- 計画内容が都市景観形成に及ぼした影響に着目して -

勝山 和弥

1. はじめに

1-1. 研究の背景及び目的

我が国は、国土条件から地震や火災、水害などの自然災害が多く、それゆえ都市は被災と復興を繰り返し経験してきた。これらの災害史を扱うことは、被災当時の技術や計画を把握し、現在の復興計画施策上の基盤の一助となる。また都市が、災害復興の痕跡を残し現在に至るといふ考えから、都市景観形成を考える上で重要な意義を有する。

本研究は、能代市における大火復興が、その後の都市景観形成に与えた影響について明らかにすることを目的とする。

1-2. 研究の方法

まず、国と県の図書館及び公文書館に所蔵されている文献から研究対象都市の大火前後の都市の状況と復興計画に関する情報を読み取り、整理した情報から景観構成要素を抽出する。さらに、形成景観を「近景」、「中景」、「遠景」の景観レベルで整理、分析を行う。以上の把握・分析に基づき、能代市の復興計画が都市景観形成に与えた影響について、分析・考察を行う。

2. 復興都市計画による景観形成への影響についての分析

2度の復興事業の主な特徴は、以下の4つに要約できる。

- ・防火帯の設置
- ・道路網の整備
- ・防火及び準防火地域の指定による建築物の整備
- ・公共施設移転と跡地利用

2度の復興事業では、事業計画の骨格に大きな相違点が見られなかった。さらに関連する法制度についても、規制の方法や運用に仕方に大きな相違点はなかった。しかし、2度の復興計画による形成景観において相違点が見られた。

1次大火復興計画では、焼失区域一帯を乙種防火地区に指定し都市の不燃化が意図されたが、財政難や資材不足により実現しなかった。防火帯設置においても同様に、沿道の不燃化が困難であった。そのため防火性能の向上とあわせて沿道的美観に配慮し、中央分離帯と沿道への植樹が積極的に行われた。また小公園においても、植樹による美観向上への取り組みがみられた。結果として、官庁街等を通り市民生活の中心となる主要道路に緑が溢れ、能代市の中心市街地に「木都」としての魅力ある都市景観が形成された。

一方、2次大火復興計画では、一部の区域において防火地域の指定や耐火建築促進法の適用により防火建築帯が造成された。さらに、道路幅員の拡張が困難な際に、防火帯としての延焼遮断性能の確保を目的とした、耐火構造建築物の集団配置も行われた。したがって、2次大火復興計画においては景観への配慮よりも、延焼防止性能の確保を優先し、沿道の不燃化が積極的に行われた点が特徴であるとかんがえられる。結果として主要道路の沿道には、RC等の不燃材料を中心とした近代的な町並みが形成された。



図 1.1 次大火復興計画による防火帯への植樹（現在）



図 2. 防火地域指定区域の沿道景観（現在）

3. 結論

2度の復興計画事業の比較から、大火復興計画がその後の都市景観形成に与えた影響としての共通点は、広幅員道路と街路樹による防火帯としての近代的な道路景観や公園緑地の設置による緑の景観、建築物の計画的集団配置による統一感のある沿道景観の3点が挙げられる。

さらに2次大火復興計画では、準防火地域のみ地域指定に防火地域の指定を加え、積極的に沿道の不燃化が行われた事で不燃材料による沿道景観が形成されるに至った。

以上のことから、大火復興計画が能代市の近代化において、都市基盤を形成しただけでなく、近代的な都市景観の形成において強く影響しているといえる。

今後の課題は、東北地方における他の事例との比較をし、風土的な要因に対してどのように防災性能の確保が検討されたかを把握したうえで、大火復興計画が都市景観形成に及ぼした影響についてさらに深く考察していくことである。

卒業修了展 in 信金プラザ

経営システム工学科との共同開催



行事紹介

2月17日と18日に由利本荘市のしんきんプラザで、経営システム工学科と共同の卒業・修了展が開催されました。

今回、都市・地域計画ゼミからは4年の戸嶋くん、院2年の勝山さんが研究を発表したほか、私達の研究室が継続的に活動に関わらせていただいている石脇通りと大門・本町通りのこれまでの活動を石脇地区上町会長の石崎さん、大門・本町通りまちづくり委員長の菅野さんにそれぞれ発表していただきました。

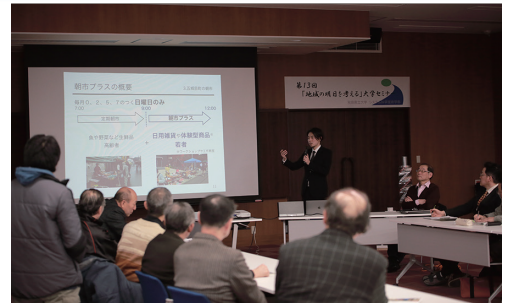
当日は多くの地域住民に訪訪していただき、盛んな議論が繰り広げられました。



担当者コメント (須田)

今年度の卒業・修了展は私達のゼミからの研究発表のみならず、石脇通りと大門・本町通りの活動報告があり、充実した内容となりました。中でも、歴史的街並みを活用したイベントを催している石脇通りと、住民が主体となり、行政も携わって景観形成に向けた取組みが行われている大門・本町通り、違う側面を持った2事例に関する議論はとても興味深いものがあり、都市計画とまちづくりについて今一度考えるきっかけになりました。また、地域との交流を図る上でとても有意義な会となりました。

準備・運営にあたり協力して頂いた皆様、ありがとうございます。
卒業・修了展担当 須田一陽 (院2年)



卒業研究発表の様子



石脇住民の方々の様子



参加した学生・教員たち

祝賀会



今年は、3/23(金)にホテルアイリスの10階にて、卒業生の祝賀会を執り行いました。先生方にも多くの参加を頂き、盛大な祝賀会だったと思います。残念ながら、卒業生全員の参加は実現しませんでした。各が卒業生同士で思い出を話しあったり、お世話になった先生方との最後の交流を楽しむことができました。また、お世話になった先生方への感謝の気持ちとして、花束と記念品の贈呈を行いました。

それぞれの卒業生が別々の道へ旅立つ前に、別れを惜しむ良い機会にもなった会でした。4年間、ありがとうございました。
(コメント:桂 大志 写真:尹 荘植)



証書を手にした卒業生



祝賀会に参加した学生と教員



お礼の花束

卒業・修了生の紹介

本荘での思い出をひとこと!

<学部生>



桂 大志 株式会社 オオバ
本荘駅前朝市が私の思い出の場です。本荘の魅力と人々の優しさにふれました。



戸嶋 大輔 株式会社 北洲
海と山、石脇の歴史的町並み、満天の星空。穏やかな時間を送れる第二の故郷。



西田 昂平 株式会社 セット設計事務所
鳥海山はいつも綺麗でした。大学4年の夏に山頂に登った事は良い思い出です。

<修士生>



勝山 和弥 株式会社 JR東日本ビルテック
本荘の思い出の場所は初めてスノーボードを経験した矢島高原スキー場です。



田口 真也 株式会社 北洲
「石脇公園」市街地を見渡すことができる本荘唯一のスポットだと思います。



荒生 竜也



ご退官される先生

小林先生ありがとうございました。



藤沢周平を真似れば、「残髪尚遠禿」というところでしょうか?後頭部の写真を見ると、時の流れをしみじみと感じます。念のため清左衛門残日録では「残日未遠昏」とありますが、正しくは「残日尚遠昏」の方が意味をよく表すとのことでした。最終講義で触れたように、これまで「赤頭巾」の優しさと「黒頭巾」の逞しきの狭間で奮闘してきたと思います。とは言っても、やり残してしまったことが数多くあり、「少年易老難成学」の真意がようやく解ってきました。「やりたいこと」と「できること」は違い、前者は単なる「夢」「希望」であって、後者は「信念をもって実行できる能力」です。私の祖先は信州松代の出身で、そこでは昔、武田信玄と上杉謙信が覇権を争っていました。何故かそこに共通する「信」という字が好きで、「信念を持つ」ことを大切にしてきました。今年で大学を去ることになりますが、皆さんは「やり残し」の無いよう、大計を持って人生を歩んで下さい。

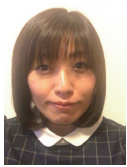
小林 淳

新しい先生が着任されました!



昨年度の10月から本学に着任した環境計画学研究グループの竹内です。私は本学に1期生として在学し、卒業後は民間企業の研究所にて約13年間勤務しておりました。久しぶりに大学に戻ってきて、当時、学生時代の先生方とともに仕事ができる事が大変光栄であり、慣れ親しんだ大学・本荘で学生の皆さんとともに有意義な時間を共有できればと思います。

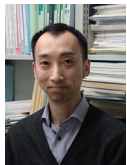
竹内 仁哉



本年度から助手として着任しました大塚亜希子と申します。出身は能代市です。建築を学ぶ前は、バイヤーをしていました。地方都市の活性化に興味を持ち、その足がかりとして建築を学びたいと考え、東京理科大学の建築学科に編入学し、今に至ります。研究テーマは「木造建築部材の耐久性調査と補修に関する研究」です。よろしくお願いいたします。

大塚 亜希子

昇任おめでとうございます



本学開学時に助手として赴任してから、早いもので19年がたちました。当時の本荘市は、コンビニ等もほとんど無い街でしたが、開学を機に多くの教員や学生がこの街に関わることで、随分と変わったなと感じています。今後は准教授として、このような地域の発展に貢献できるような活動をしていきたいと考えています。

石山 智

新4年生 研究テーマ

- 高橋 瑞 「地方中心市街地における医療施設移転による影響とその跡地利用に関する研究」
- 千葉 春樹 「秋田市におけるサービス付き高齢者向け住宅における高齢者の居住環境評価」
- 中嶋 洸太 「立地適正化計画策定都市における計画策定プロセス分析」
- 本間 匠 「秋田港と都市形成」
- 八島 咲子 「歴史的建造物の保存・活用を活かしたまちづくりに関する研究」



▲街頭ヒアリング調査の風景



▲現地調査中のオフショット



皆さんこんにちは。山口ゼミ 12 期生の清水里美です。今回、このような機会をいただき大変嬉しく思います。私は現在、建設コンサルタントという業界で働いています。入社後、地方創生総合戦略策定業務や子育て支援センター・保育所の基本計画策定業務、公営墓地の規模算定・適地選定業務など、まさに、ゆりかごから墓場まで幅広い業務の担当をさせていただきました。

今年度は、福島県某自治体の避難区域解除に向けた、学校や認定こども園等の改修・新設事業にも携わり、辛いこともありましたが、やりがいも多く貴重な経験となった1年でした。

近年、特に感じることは「伝える能力」が欠かせない（しかし意外と難しい）ということです。それは、説明する力や、書く力、聞く力だと思います。是非、研究室やゼミで、この力を鍛えることを意識してみてください。先生や仲間に「なるほど！いいね！」と言ってもらえたらしめたものです。

OB・OG の皆様、同窓会等でお会い出来るのを楽しみにしております。（また仙台で飲みましょう。）最後になりますが、皆様のご健康とご活躍をお祈りしております。

12 期生 清水里美（国際航業株式会社）

技術本部 東北技術部 まちづくりグループ 都市再生チーム

都市計画学会



2018 年 3 月 3 日（土）に仙台で行われた都市計画学会東北支部に参加してきました。ゼミからは、学部 4 年の桂、戸嶋、西田、院 1 年の小島、須田が発表を行いました（学年は 2017 年度末時点のもの）。今年度の成果をまとめ、外部で発表し意見を頂いたことは、今後の研究の方向性を見出すことのできる貴重な機会となりました。また、懇親会では他大学の先生方や学生の皆さんと情報交換ができ有意義な時間でした。都市計画に対しての根底にある問題意識を共有しながらも、それぞれの研究環境での異なるアプローチによる研究成果の交流は大変に価値のあるものだと感じました。（院 2 年 小島寛之）



懇親会の様子

編集後記

今回の N.L.2 号の作成に際し、ご協力頂いた皆様に感謝申し上げます。また、先生方や先輩方にも校閲やご指導を頂き、大変お世話になりました。慣れない作業の連続でしたが、そこから学んだことはたくさんありました。これからも、都市・地域計画研究室の活動を発信していきたいと思っておりますので、今後も N.L. のご愛読のほど、よろしくお願いいたします。
<2018.5.14 NL 編集部> 中嶋洸太 八島咲子 小島寛之 山口邦雄

URPS 編集部

〒015-0055

秋田県由利本荘市土谷字海老ノ口 84-4

秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科

☎: 0184-27-2053 yamaguchi-k@akita-pu.ac.jp

担当 山口 邦雄